

有島での暮らし

下田伸一

私たち家族は有島で暮らすようになるまでニセコ町のいわゆる「山側」に約十年間住んでいた。慣れ親しんだ家であったが2匹の犬に加え3人目の子どもが生まれていよいよ家も手狭になってきたことから引越しを考えるようになった。

経験がある方ならお分かり頂けると思うが、このニセコで引越しをしようと思うとなかなか思い通りの物件に巡り合えない住宅事情である。しかも犬連れとなればさらに選択の幅が狭まる。色々と熟考し結局「家を建てる」という結論に至ったものの、今度はその場所選びにまた一苦勞である。考えることは多く、冬の除雪や子供の通学のこと、近所付き合いを含む地域のコミュニティのこと等々。そして場所を選ぶからにはこだわりたいのが風景である。特に羊蹄山の眺めは重要である。そうして探した甲斐あって（羊蹄山麓あるあるではないが）おらが町、有島から羊蹄山を望むロケーションはどこよりも最高である。

縁あってこの有島の地に暮らせることになったが、恥ずかしながらそれまで「有島」についての知識は、記念館に数回訪れた事がある、という程度しか無かった。

その有島初心者状態の当時、移り住んですぐ入会させられた（改め、させて頂いた）有島町内会では大きなカルチャーショックを受けた。何と毎月一回の集会が開催されるのである。会場はあの、ザ・ノスタルジックこと「有島謝恩会館」である。その集まりでは広報の配布から始まり、地域の四方山話や互いの近況報告のようなやり取りを参加者が作り持ち寄った漬物を肴にちよつと一杯呑みながら話して終わる、といった具合である。酒は「バクダン」と呼ばれる混ざりモノでこれがまた効く。この会場空間といい、参加住民が醸し出す雰囲気たるや昭和そのものである。今では当たり前の習慣となったが、移り住んだ当時は町内会活動の全てが新鮮だった。新参者の私にとって「デイープ有島カルチャー」の洗礼は強く印象に残っている。

初めて近所の農家さんの手伝いに呼ばれたときは、何か少し住民として認められたような気がしてとても光栄な気分であった。有島での米の粃摺りやユリ根作業は収穫時期の喜びの作業そのものである。労働後にお裾分けで頂く野菜を家族で食べる夕餉の時間は子供たちにとって最高の食育の場である。

時折、誰がくれたか分からない野菜が玄関前に勝手に置いてあることがある。その野菜を心から安心して食べられるこの幸せ。それはまさにこの地域の「相互扶助」の精神が成せる賜物ではないだろうか。

山側に住んでいた当時は町内会コミュニティもなく広報も配られない状況であったがそれが当たり前になっていた。それぞれの移住者が互いに干渉せず暮らしておりニセコでありながら都会暮らしの一面があったように思う。それも一つのニセコライフスタイルと言えるが、有島での暮らしの魅力を知ってしまったらもう戻れる気がしない。

そんな私も今年度、有島町内会長を仰せつかっている。全く以って身に余る大役ではあるがそれも気がつけば残すところ3ヶ月程。新参者で若輩者の自分を受け入れてくれた有島の風土と人々に感謝しつつ、これからも変わらぬ有島精神を後世に引き継ぐ一助を担って行きたい。愛すべきバクダン文化と共に。(平成29年9月30日発行 土香る会 会報4号)

